

# ヨーロッパのメルヒェンと伝説における巨人

## —おそれ、望み、排除—

ハンス＝イェルク・ウター  
翻訳 間宮史子

不器用でまぬけなのは巨人、賢くて悪知恵があるのはこびと。ヴィルヘルム・グリムは、身体の大きな超自然的存在について、はっきりとこう述べていました（『グリム童話集注釈書』1856年、p. 407）。

小さな姿のこびと、また、ほとんど想像もつかないほど大きな巨人は、これまで常に物語る人間の注意をひいてきました。こびとや巨人は、現実にはまったく存在しないような想像上の存在ではありません。先天異常学の分野からすれば、これらは、現実に小さかったり大きかったりという外見を与えられた存在です。怪物という概念が、もともとは自然あるいは神の創造意志の戯れをあらわすなら、それは、人食い、怪獣、化け物、オーガなどと非常に似てきます。つまり、否定的なものをさす概念的な限定、教会の父アウグスティヌスにならうと、神の予兆や警告のしるしとしての怪物という、キリスト教的な解釈に帰すことができます。

昔から、巨人族全体または個々の巨人について、神話的な物語が存在しています。聖書の時代（『旧約聖書』）には、ヘブロンのエナクの子どもたち、巨人のネファイム、ネフィリムはカナンに定住しています。ペリシテ人のゴリアテのような、巨人のような人間は、現在にいたるまで集合的意識のなかに生き続けています。ゴリアテとダビデの見たところ対等でない戦いは、身体の大さが全く異なる両者が戦うという例で、慣用的な意味を獲得しています（訳注：「ゴリアテとダビデの戦い」は、勝ち目のない戦いを意味する）。

ギリシア神話では、不死身のティタンあるいは不死身に近いギガスといった巨人たちは、神々自身のうち、あるいは、神々と人間の結びつきから生まれ、暴力的な自然の力の人格化とみなされました。たとえば、リビアのギガス、アンタイオスは、地面に触れただけで、つまり、彼の母である大地に触れただけで、ものすごい力を得ます。そして、この接触魔術によって敵を制圧することができました。ローマ人は、特に北方の地域は巨人の住むところだと考えていました。インド神話では、ブラフマーが巨人をつくりました。巨人は、神々との戦いに負け、稲妻でうち負かされました。ゲルマン神話は、巨人を神々や天使に抵抗する力とみていました。それらは、山の巨人とトロールに分けられ、巨大な人間の姿をした不気味な存在と理解さ

れていました。一方、魔法を使う巨人は、荒々しい狂暴な自然を体現しています。巨人はみな、フリムトゥルゼ族、つまり氷の巨人族あるいは霧の巨人族からでました。世界ができるときにすでに、巨人が協力したといえます。巨人のそのほかの行いは、しばしば、神々に対する戦いやそれに続く争いと関連しています。たとえば、グルジアのアミランによる火盗みですが、アミランは、人間にいいことをしてやろうと天の火を持っていこうとしたので、罰として、プロメテウスのように洞穴の中で鎖につながれます。巨人の武器は、騎士が持つようなものでなく、岩の塊、こん棒、木の幹からできています。

中世の英雄伝説や騎士小説には、身体の高い登場者が実に豊富に語られています。そのような登場者は、魔法使いや妖精と並んで、援助者や敵対者として重要な役割を果たしています。ディートリヒの叙事詩（訳注：13～17世紀にドイツ語圏で普及した、ディートリヒ・フォン・ベルンを中心人物とする英雄叙事詩の総称）では——この叙事詩は部分的には9世紀にさかのぼりますが——、巨人はディートリヒの敵対者です。たとえば『エッケの歌』では、功名心にかまれた若い巨人エッケがディートリヒに挑みますが、ディートリヒは正当防衛で意に反してエッケを殺します。人間の男たちと女たちが、巨人の支配下に陥ることになると、物語の緊張が高まります。巨人に捕らわれることは、不変の、明らかにとても古いモチーフです。けれども、強いられて巨人のところにいるのは短期間です。そんなわけで、『ズィゲノート』では、ディートリヒは力のある巨人ズィゲノートの支配下に陥りますが、ヒルデブランドによって解放されます。『ヴィルギナル』では、ディートリヒは、女王ヴィルギナルに毎年乙女をさしだすように強いていた人食いの異教徒オルキーゼにうち勝ちます。ディートリヒは、何度も竜との戦いにもちこたえなければなりませんし、巨人の力から救われなければなりません。最初のドイツの「ミレズグロリオズ（訳注：紀元前3～2世紀に活躍した古代ローマのプラウトゥスの喜劇に登場する兵士の名前）」といえるのは、巨人アイスヘーレです。アイスヘーレは、敵を、草を刈るようになぎ倒し、鳥のように槍に突き刺したと自慢します。

巨人は人間の援助者として、短期間で巨大な建築物を造ることもあります。それはわずかな報酬でなされ、それも、その報酬は依頼者が彼らの名前を当てればもらわないという約束です。この、すでに『エッタ（古代北欧歌謡集）』にある建築名人のテーマは、特に、近世（16世紀以降）の北ヨーロッパと中央ヨーロッパの伝説に多くみられます。そこではしばしば、超自然的登場者である悪魔と巨人が交替してあらわれます。後のメルヒェン的あるいは伝説的な話には、神話の登場者の比較的古いイメージが疑いなく影響を及ぼしています。しかし、初期の自然史や民間療法の本における言及や、哲学や神学の考察もまた影響を与え、巨人やこびとに似

た存在のイメージに、つまり、その起源、外見、存在、人間に対する行動などに、その影響が残っているといえます。比較的古い伝承にすでにみられる、敵対者でもあり援助者でもあるという両面性は、近世のメルヒェンや伝説における巨人の特徴となっています。巨人は神とは異なる存在として、メルヒェンや伝説の世界に住んでいて、新しいメディアのなかで姿を変えて私たちの前にあらわれます。

居場所として巨人が好むのは、遠く離れたところです。巨人は世界の果てや、山の上や空に住んでいます。彼らの外見は、人間の身体の異様な誇張のひとつといえ、超自然的存在の姿を普通のものから際立たせてみせます。巨人の男と女はものすごく太っていて、耳と鼻からの分泌物は数百キロの重さがあり、ひげの毛は荷車数台分にもなります。彼らは縦に大きいことも横に幅広いこともあります。少なくとも12エレン（約8メートル）の大きさがあり、あるいはセイヨウスギのように大きく、カシの木のように強く、ときとして目がひとつ、または目が3つあります。彼らは6本指あるいは4本指で、足の指も同様、また、指が逆にはえていることもあります。巨人は、山々を積み上げるでっぴり太ったガルガンチュア（訳注：1534年刊のラプレー作の物語に登場する巨人王）のように、驚くべき食欲で、ものすごくたくさん食べることができ、その排泄物は湖をひとつ一杯にするほどです。巨人は家族であられることもあるし、2人であるいはひとりであられることもあります。彼らは、信じられないような体力を自在に使って、地震をおこし、土を運び、足1本で川を堰きとめ、揺さぶり、ひっくり返し、踊り、他の巨人と戦い、大地をどんどん叩きます。

巨人はその本質から、人間のお手本として描かれることは稀です。しかし、『ジャンガル』という、きわめて重要でよく知られた、蒙古民族のカルムイクとモンゴルの叙事詩では異なります。『ジャンガル』において、99の徳をもった巨人ウラーン・ホンゴルは、主人公の理想像を体現しています。彼は最も恐れられ、何にも動じません。そして、主人公を助けます。しかし大抵、巨人は人間には敵対的です。こびとや水の精などとは異なり、巨人は、困難な状況にある人間の援助者にはなりません。

メルヒェンにおいてだけ、人を食う巨人が存在します。たとえば、ペローとグリムによって広く知られた親指小僧のメルヒェンでは、親指小僧は、そのような超自然的な人食いから身を守らなければならず、人食い鬼のところから逃げてきます。ヨーロッパ文化圏には、グリム童話によって知られるようになった人食い鬼もいます。それは、3本の金髪をもった巨人あるいは悪魔です。この敵対的な巨人や悪魔について、エチオピアやユダヤ、あるいはインドの人食い巨人のイメージ、つまり、犠牲者である人間を発見する前から動物的な嗅覚でその存在に気づくという、人食

い巨人のイメージがもとになっているかどうかは定かではありません。

世界の多くの地域のメルヒェンにおいて、人間と超自然的存在が出あったときに語られる、比較的決まった構造・構成があります。ただし、これは一次元的な世界です。両者の遭遇から、必然的に争いがおこります。争いは物語のクライマックスです。主人公や女主人公が、留守にしている人食い鬼の家に隠れます。彼らは、やりとげられそうもない課題の答えを人食い鬼から間接的にききたいからです。人食い鬼は知らずに彼らにその答えを教えてやることになります。帰ってきた人食い鬼が人間の臭いをかぎつけ、それを「臭うぞ、臭うぞ、人間の肉の臭いがするぞ」という決まった言い方で言います。すると、人食い鬼の女房、あるいはおばあさんや娘が、なにか口実をつかって人食い鬼をなだめ、隠れている者が見つかってしまうと、今食べなくてもいいじゃないかといって、主人公や女主人公を救います。主人公や女主人公は、それによって目的を達します。目的を達成する前にまだ、巨人との間にいくつかの危険な試練があることもあります。これに対して、彼らを助けた女の巨人には、しばしば悪い結末が待ち受けています。彼女は自分の子どもや自分の命を失います。

けれども、巨人はいつもうち勝つのが困難な存在ではありません。多くの笑い話や愚か者話において、巨人は超越的能力をもっているにもかかわらず、人間の主人公より弱いと語られています。巨人は悪魔とも交替しえます。愚かな巨人の原型は、ホメロスの『オデュッセイア』で知られる巨人ポリュペーモスです。そのような存在は、ものすごい強さのほかにはなにももたず、単に、超越的な力を体現した巨人です。巨人は、たやすく木々を倒したり、木々を曲げたりかついだりします。ところが、このような力は主人公の賢さで打ち負かされます。たとえば、グリム童話の「勇敢な小さい仕立て屋さん」では、それが何度も語られています。勇敢な小さい仕立て屋や、それに類似した別の主人公は、しばしば意図しなくても巨人に、彼らの方が巨人より強いと思わせます。それどころか、彼らが身体的には自分より強い巨人から逃げようとする、逆に巨人の方が彼らから逃げていくことになります。主人公はあつかましく大胆に行動し、巨人に自分は怖がりやであることを認めさせなければなりません。巨人は、無邪気に指を万力にはさませるような愚か者であるばかりでなく、むしろ、若者に欺かれて富を奪いとられ、あるいは殺されてしまう、だまされる存在です。

たとえ巨人が全く悪いことをしていなくても、巨人に対して悪意のあるストーリーは問題にはなりません。教訓的規範は、このような行いを非難すべきものとみなすでしょうが、これは、多くの笑話メルヒェンや笑い話に特徴的なものです。つまり、伝統的な価値観をもとにしてではなく、敵を策略でやりこめることへ

の喜びが勝っているのです。巨人は、主人公や女主人公に対するほかの敵対者と同じ役割をもちます。つまり、巨人に対する人間の勝利は、竜退治の戦いと同様、救出や解放の行為とみなされています。

## おそれ、望み、排除

こびとや家の精といった、神秘的で、たいがい目に見えない、超越的な力をもった存在のことは、多くの民族が知っています。おそらく、そのような「たくさんの精霊の世界を体系化すること」(ルッツ・レーリヒ)は、ほとんど不可能でしょう。精霊についてのイメージは、次のことと関連しています。人間は、自然が生きていると考え、その存在によって、一定の自然現象が決まったときに起こるのはなぜかということの説明しようとしたのです。つまり、自然現象の人格化としての、超自然的力をもつ存在、ということです。

このような考え方は、通常「自然神話」ということばのもとに包括されますが、現在では古くさくなりました。比較的後の宗教学的なアニミズムの考え方も同様です。これは、進化と関係づけて、そのような存在の成立を次のようなことに帰せしめようとした。自然、とくに植物や樹木は魂をもっているといいます。それは、人間の魂と似ていて、植物や樹木のなかにも存在するのです。このような精霊には、死者の霊魂が関係しているという考え方もありましたが、たいした反響はありませんでした。しかしながら、明らかに理性では説明できない世界があります。というよりも、そういった精霊のようなものによってあらわされ、人間の行為に介入してこようとする力がある、といったほうがいいかも知れません。

現代でも、私たちは、そのような存在と遭遇したと言っている人々の報告を目にします。なかには、その遭遇を詳細に記述しているものもあるし、そのような個人的な報告(体験談)が、音など、通常感じられることによって説明されることもあるし、多くのことが説明されないままの場合もあります。現代の伝説においては、必ずしも、魔女、悪魔、妖精、また、こびとや水の精などの超自然的存在が話題になるわけではありません。そのような存在には、地域によって、さまざまな名前がつけられています。

そのような話の背後には、どのようなおそれや不安が隠れているのか、話をする人間は非現実と思われる世界の話をもどどのように感じたのか、なにを私たちは抑圧と排除とみなすのか、それらはなにに基づいているのか……。説明できないできごとがある限り、私たちはそのような話を讀んだり聞いたりしていくのでしょうか。ここ東京の白百合女子大学での今回の講演が、ヨーロッパのメルヒェン世界や伝説世

界の巨人やそれに類似した存在について、少しでも明らかにすることができたなら幸いです。

絵に描かれた巨人の姿は実に多様で、それは人気のあるあらゆるメディアに広がっています。ここに、巨人の図像化の特徴的な例をいくつかお見せします。



図版1 子どもを奪う山男 木版 ルーカス・クラナッハ画 16世紀



図版2 山男 タベストリー 1475年



図版3 山男 ブロンズ 1550年



図版4 巨人ベルナルド・ジグリ 銅板 1750年



図版5 リューベツァール (山の精)  
ルートヴィヒ・リヒター画  
1850-70年頃



図版6 若い巨人 パウル・グロート  
ヨハン画 1892年



図版7 親指小僧 グスタフ・ドレ画  
1862年



図版8 勇敢な小さい仕立て屋さん  
G. ビンケ画 1930年



図版9 トロル E. ヴェーレンショル画  
1896年



図版10 トロル Th. シテルセン画  
1885-1911年



図版11 トロル Th. シテルセン画  
1885-1911年



図版12 ジャイアント インターネット  
1970年?